

創作落語

有岡八景亡者の戯 (ありおかばっけいもうじゃのたわむれ)

作：足立 繁

■時：明治40（西暦1907）年10月下旬

■所：川辺郡伊丹町

■登場人物

【岡田辰市】

【山口寅治】

【荒物屋主人】

【亡霊荒木自然】

【うどん屋】



【山口寅治】

辰ウ、いてるか？

【岡田辰市】

おうおう、上がって、上がってんか。いいやいな、来てもろたんはな、有岡座の次の次の出しもんを頼まれたんや！また寅治の知恵貸して、役者の方も！

【山口寅治】

何や、芝居の出しもんかいな。次の次いうたら、年の暮れにかかるさかい、お事多さんは「元禄忠臣蔵」やな。

【岡田辰市】

いや、今度は、伊丹を舞台にしようと思てんねん。この前作った「小栗判官」が池田くれは座の小屋主の目に止まって、連続興行をくれは座でうったんやが、これが当たって。

【山口寅治】

おうおう、伊丹の有岡座よりも大入りが続いたいうて、聞いてるで。

【岡田辰市】

そこでや。くれは座の小屋主が今度は「全くの新作を」言うて有岡座に頼みに来たんや。

【山口寅治】

それにしてもそんなんあかんで！新作ちゅうようなもんは有岡座でやる芝居やあれへん。豆芝居とちゃうんやさかい、黒犬のおいど・・・尾もしろない。

【岡田辰市】

そこやそこや、有岡座でやる芝居ちゅうたら、「義経千本桜」「曾我兄弟」とか話の筋は決まってるやろ。そこから抜け出た伊丹を舞台にした新しい話をいう有岡座からの注文やし、俺も新しいモンを作りたいんや。

【山口寅治】

ふーん 伊丹の話なあ昔々そうやな ン 今は鉄道のステンショになってる古城が舞台やな。古城いうたら有岡城、有岡座でやるのには持ってこいや。有岡城は荒木村重やな。池田や伊丹の城を次々と奪い取ってるけど、戦わずしての追放や。友達を大事にする男として修身の教科書にも載ってる優れた人物や。それから、嫁さんというのが「だし」さん云うんが二十歳そこそこで「いまやうきひ（今楊貴妃）」いわれてた。安土の織田信長も知ったらしい。最後はその信長にみせしめで殺されるという悲劇にはなるけど。よっしゃ！演目は「城山 秋の月」で決まりや！

【岡田辰市】

修身の教科書に載ってた荒木村重いうたら覚えてるわ。伊丹の人や言うてえらい盛り上がったわ。そやけど話作るにも、荒木村重の細かい事あんまりヨウ知らんがな！

【山口寅治】

そら昔の その時の人に聞いて、聞いたとおりに、そのままの話を書かねん！

【岡田辰市】

昔の人に聞いたらええ言うて、簡単に言うな。昔の人にどうやって？

【山口寅治】

野村の発音寺、門前のはすかいの店で売ってるそうや。

【岡田辰市】

ああ、いもりの黒焼きとか漢方なんかも売ってる「あらもん屋」か！何買うねん。

【山口寅治】

「越中越中富山のたんこぶたん」とかなんか いうもんが死人を蘇らせるねん。

【岡田辰市】

えっ！ええ～死人がよみがえるか！「越中禪」ちゃう「越中富山のたんこぶたん」言うもんで。

【山口寅治】

墓や位牌の前でくすべたら出て来るねん。ドロドロドロドロ、って

【岡田辰市】

幽霊やがな！ほんまあかいな、それでたんこぶたんちゅうもんで誰を呼び出すねん。

【山口寅治】

辻村の幽霊坂に荒木村重の子の墓があんねん。

【岡田辰市】

幽霊坂いうたら、あの藪の中かいな。

【山口寅治】

墓の前で焚いたら、墓のヌシがよみがえる。荒木村重の子を呼び出して芝居の台本のネタを教えてもろたらエエねん。

【岡田辰市】

わかった。さすが、寅治よう知ってるな。ほな、今から、すぐ行こ！

.....

【山口寅治】

(ドンドン)うお～いッ、早よ開けてくれ(ドンドン)うお～いッ

【荒物屋主人】

うるさいなあ、ちょっと待っとくなはれ、いま開けまっ……。

【岡田辰市】

え、ええー、戸が開いた。

【荒物屋主人】

戸を叩いたんは、あんさんがたでんがな、何でんねん。

【山口寅治】

いや、えらいすま、ちょっと二十銭がとこ、おくれ。

【荒物屋主人】 二十銭、何をしまんねん？

【岡田辰市】 わかるやろ。

【荒物屋主人】 わかりまへん、何をしまんねん？

【岡田辰市】 「何を」てお前……、ドロドロドロ「たんこぶたん」二十銭。

【荒物屋主人】 気ショック悪う寝入りばなにケツタイな人2人そろて入って来たがな。あのお大将ら、夜中だんねん。もう店閉もてまんねん。おたくら何買いに来なはったん？

【岡田辰市】 分からんかなあ。「たんこぶたんどロドロドロ」これだけ言うてんのに、わからんか。

【荒物屋主人】 わかりまへん。

【山口寅治】 おまえとこで売ってる、「た・ん・こ・ぶ・た・ん」や。

【荒物屋主人】 うちで売ってる？「たんこぶたん」言うたら、え～、萬金丹でつか。

【岡田辰市】 鼻くそ丸めた萬金丹。ちゃうわ。

【荒物屋主人】 ほたら あんた虎の胆のう虎胆丸。

【山口寅治】 ちゃう。

【荒物屋主人】 熊のイ言うてる熊胆丸。

【山口寅治】 ちゃう。

【荒物屋主人】 黄門さまの六神丸。

【山口寅治】 ちゃう。

【荒物屋主人】 鍾馗印の腹内毒掃丸、陀羅尼助のダラスけさん、いもりの黒焼きソデフリン、脚気の 治療オリザニン、ポンポコポンあーらどうしたの七ふく、 消化酵素ジアスターゼ 伊吹山なら「やいと・もぐさ」と「蒲油」。

【山口寅治】 ちゃうちゃう。

【荒物屋主人】 ほたら。

【岡田辰市】 ちゃう。

【荒物屋主人】 まだ言うてまへんがな。ま。ときどきお客さんが名前まちごうて注文しはるんはあとで「えっ」ちゅうようなもんですわな？

【山口寅治】 「えっ」ちゅうようなもん？「えっ」ちゅうと。ちょ、ちょっと待って、ポチポチ近付いてきた……。ええ～ツと「えっ」ちゅうと。そや、「越中富山のたんこぶたん」。

【荒物屋主人】 上手いことスカタン言うなあもし、そらあんた「越中富山の反魂丹」ちやいまつか。

【岡田辰市】 そおか、「越中富山の反魂丹」二十銭。

【荒物屋主人】 おおお、けったいな人やなあもお、夜中に来て反魂丹買うのん ちよつと待っとおくれやっしゃ。

【山口寅治】 えらいすまんなあおい、それ火の中にくべるやつやろ。

【荒物屋主人】 あ、あきまへんで。そんな無茶したらいかん。こらあ漢方でっせ。こんなもん火の中へくべたらあきまへん、火の中にくべんのんは「蚊燻べ」ですわ。

【岡田辰市】 何ぬかしてホンマに、今頃、蚊なんか飛んでへんがな。火にくすべたらドロドロドロドロ、って死人が出る反魂丹やろ。

【荒物屋主人】 えっ！ああ、わかりました。ちやいまちやいま、それやったら反魂香。漢方やおまへん。お彼岸に迎えるお香ですわ、品モンの名前はちゃんと言うてもらわな。反魂香ですわ！ちょっとまって、えーっと、あ、今、売り切れておまへんわ！

【岡田辰市】 ええっ！ええ。ほんまに無いんか？

【荒物屋主人】 おまへん、今は置いてまへんて！時期が違います！

【岡田辰市】 品物、切れたらあとちゃんと仕込んどきいな、おれらが買いに来んのん分かってるねんから。

【荒物屋主人】 むちゃ、言いなはん。

【山口寅治】 どっか、奥う、しもてるやろ、探して！

【荒物屋主人】 いや、おまへんてな！ほらこの通り。からの袋だけですわ。ここに お香が入ってましてん。

【山口寅治】 そこに入ってたん？香はいつてたんやったら「かざ」は残ってるやろ。それで効くやろ！その袋なんぼ。

【荒物屋主人】 いや、袋だけやったら・・・袋だけ？お代を頂くわけにはいきまへんな。

【岡田辰市】 お代を頂くわけにはいかんということとは？

【荒物屋主人】 ま、ただですか。

【岡田辰市】 ほな、ただの袋、全部もろとこ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

辻村の幽霊坂

鬱蒼と茂った藪の中に「自然居士」という石碑がありまして。この2人がその前にやってきて、反魂香の袋をば火の中にくべます。カンコクサイ匂いととも青白い陰火がボウッと輝いたかともみますとその時、鎧甲を着た若武者の姿が朦朧と現れます。

【岡田辰市】 ええー、ええ。出たあ！ほんまに出た！

【亡霊荒木自然】 臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前、深夜に及びて交渉に訪ヌル兩人たち、用向きは、何となるぞ？

【山口寅治】 これはこれは、お初にお目にかかるでござ候。お侍さま、お主さまのご氏名は？

【亡霊荒木自然】 我の使命とな。我が使命は信長の跳梁跋扈のふるまいから、我殿 摂津守村重公の有岡城をお守りすること

【岡田辰市】 いやいや使命、任務やのうてあのお～「切藁」切藁ちゃう「しゅうろ」ちゃう「たわし」ちゃう「わたし」の名前はね「岡田辰市」ちゅうんですけども、こいつは「山口寅治」言いまんねん。あぁ～たの名前 何ちゅ～名前ですか？

【亡霊荒木自然】 何？何？ われの姓名なるや？

【岡田辰市】 えっ！ええ。あんた 「難波の割れた煎餅」はん、ちゅうんですか？

【亡霊荒木自然】 これは異なことをのたもお、わが父君は元池田の産にして、姓は池田、名は知正。あざ名を勝重と申せしが、我が母、三十三歳の折、ある夜丹頂を夢見、われを孕みしが故に、たらちねの体内を出でし頃は「鶴丸、鶴丸」と申せどもこれは幼名。父知正とともに荒木撰津守公の養子とあいなりぬれば、のち「鶴丸」これを改め「荒木自然」と申すなり。

【山口寅治】 あんさん荒木村重はんの養子の方でっか？荒木自然はん！云いまんのん？ほいで、あんさんも信長に殺されはったんでっか。

【亡霊荒木自然】 仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌、無念にも、六条河原まで引き回され……。口惜し 御母者人だし君とともに……。荒木の荒れるという文字は草むらの下に亡がらを流すとなりぬ。

【山口寅治】 いやあ、ホンマ儂いものでんな！いや儂い。

【亡霊荒木自然】 これが、某の墓じゃ。

【岡田辰市】 儂い墓 ありでっか？あんさんのおやっさんはどうしましてん。

【亡霊荒木自然】 かれとともに去りぬ。人こそ知らね帰る間もなし。

【岡田辰市】 あんさんは、京都で殺されて……。伊丹が見たいイタミガミタイ言うて……。さかさに読んで、伊丹に帰ってきましたんか？

【亡霊荒木自然】 いたみいる。

【岡田辰市】 ええ一、ええ。そんな恐縮しなはん面白いお侍さんやな、ま、ここへかけておくんなはれ！あ、かけて言うても走り回んのと違いまっせ。ほいで荒木自然はん！これこれこういうこってすわ！わたいら有岡のお城の顛末を教えて欲しおまんねん！

【亡霊荒木自然】 有岡落城の仔細とな。天津の落雁 破戦道 西ノ台の夕照 雲正坂。六根清浄一根不浄ならば、この身の申す事一通りお聞きあれ。仔細というは斯くの如し・頃は元龜も相改まり、時すぎて天正6年11月3日の儀に候や。有岡城中、千畳敷おん御上段の間には撰津守村重公、おん左座には御母公刀自智照尼君、おん奥側室だし君。介添えとして、嫡男荒木新五郎村次、家老荒木久左衛門知正 倅同名自然。これ拙者拙者。軍師には瓦林越後守次冬。渡部勘太夫、野村丹後守、木村弥一衛門吉清の4天王の面々ほか一万五千余騎。いずれもいずれもと控えたるどころ、綺羅星の如し。有岡城の遠巻といえ、撰津東端なる高槻城は譜代無敵高山右近三千人。茨木城は剛勇無双の中川瀬兵衛清秀三千五百。撰津西なる兵庫花隈城には荒木志摩守村正。北撰三田城には荒木平太夫重堅。丹波路能勢城は能勢十郎。播磨路有馬城は有馬出羽守。吹田城は吹田因幡守七郎、大和田城は安部二右門良成、塚口城加茂城昆陽城食満

城原田城刀根城椋橋城。持ち口、持ち口を間配ったりしたが今か今かと相待ったる所、暗雲深くたちこめる有岡城へ攻め寄せる信長の手勢を前にして。総大将摂津守村重公その日の出で立ちやいかにと見てやれば、黒皮緞の大鎧、白檀磨きの籠手、臍当て、鹿の角前立て打ったる5枚しころの兜を亥首に着なし、スックと仁王立ちなら、天地も轟く大音声「謀反の汚名を着ようとも難渋なにするものぞ、かかる上は蹶起、籠城を下知する！

.....

【岡田辰市】

いやあ、おもしろかったな！時間の経つのが忘れてまうで、3幕6場を中入り無しで聞いたようなもんやな。ええ男やったな、自然はん、おやっさんがおらんようになって、恨み言いわんと、愛嬌ある好男子やで。

【山口寅治】

うん講談師やな。はなし家、ちゃうわ講釈師みたいやったなあ。

【岡田辰市】

そやけど荒木村重はんゆうたら、やっぱり修身の教科書どおり豊臣秀吉の命を助けとんねんな！養子の自然はんからも慕われるわけや。

【山口寅治】

初めは信長と闘うつもりは無かったんや。それでも信長の悪行を見かねて立ち上がった英雄や。やっぱり、伊丹ゆかりの人に悪人はおらへんわ。これで芝居の筋は聞いた通りで。

【岡田辰市】

これでできるわ。おう？ 向こ に夜泣きうどん出てるがな、うどんでも食べてから台本をネロか？

【山口寅治】

おやっさん！2つ！

【うどん屋】

へっ！毎度 昨日から、「味噌煮込みうどん」できまっけど！

【岡田辰市】

いや、味噌味はいらん。普通の「しろだし」にして！

【うどん屋】

ほんだら、味噌は隠し味いうことで。

【岡田辰市】

荒木村重いうたら援軍を組織しようとして、城を出て帰られへんかったんやな。

【山口寅治】

それが、妻子を捨てて、一人生き延びたということで伝わとんねん。

【岡田辰市】

「卑怯未練な男」と「友達を大事にする男」どっちがホンマの村重はんやろ？

【山口寅治】

嫁はんの「だし」さんは？伊丹にほっとかれて、最後は六条河原で殺されてえらい怒ってたと思ったけどな。側室だしは、処刑される前に祈りささげ、最期にはにっこりと笑い、「殿…」とつぶやき、斬首されたのであります。ここは、ト書きだけでは勿体ないな。口寄せのイタコかナンカを登場させて幕前で後世の人に喋らそか？

【岡田辰市】

「今楊貴妃」いわれてただしさんにも会いたいな。反魂香の紙袋まだ残ってるか？

【山口寅治】

あるけど、ここには位牌も墓も無いがな

【岡田辰市】

ここは、惣構えの城の中や。「おんねん」で出てくるで。

【山口寅治】

怨念？だしはんは誰も、恨んでないと思うな。

【岡田辰市】

恨みやなしに、わしらの芝居の筋書き知りとうて、すぐ前にオンネン。いうて。

【山口寅治】

成程、どんな自分が登場するか、聞きに出てくるかもな。

いや、ひょっとしたら、もうその辺に出てきてるかな？

【うどん屋】

へっ！おまつとうはん。

【岡田辰市】

おうおう、こっちもらおう。会うてみたいな。

別嬪のだしさんは荒木村重の嫁さんやから30の三十路にはなってるか？

【山口寅治】

いやいや、二十歳そこそやいうてたやんか。三十路にはなっていないで。

【岡田辰市】

ずるずる「三十路（味噌味）にならん おしろのだし」が効いとおる。

